

スポーツ科目に関する意識調査

松田 秀子

はじめに

平成3年の大学の設置基準の改正にともない、本学においては翌年の平成4年度からカリキュラムの改正が実施された。従来的一般教育科目・外国語科目・保健体育科目の区分が廃止されて、教養科目となり、専門教育科目は専門科目と呼びかえられて、授業科目の区分は二領域となった。教養科目については「教育理念でもあり目標でもある深い教養を身につけ、総合的な判断力を培い、個性の伸長と自主性の涵養をはかるためには、開設科目を増加するとともに、履修に関しても規則や制限を緩和し、学生の自主的な判断による履修が出来るようにすることが重要である」という観点から、全ての科目が選択制となった。従って、新制大学発足以来必修科目であった保健体育科目は選択科目へ移行した。保健体育科目は従来『体育実技』『保健体育』の名称であったが、カリキュラムの改正により次のように改められた。『体育実技』については改正当初（平成4年度）は「スポーツⅠ a・b」「スポーツⅡ a・b」、次年度から「スポーツ基礎 a・b」「スポーツ応用1 a・b」の科目名に改められた。さらに、学外集中講義として「スポーツ応用2（スキー教室）」「スポーツ応用3（スクーバダイビング教室）」「スポーツ応用4（スケート教室）」「スポーツ応用5（マリンスポーツ）」が開講された。次に、『保健体育』については平成4年度より「ライフサイクルと健康」の科目名に改められ、他のスポーツ科目と同様に運動と健康の科目群に位置づけられた。本学では改正の検討に入ってから答申までの期間が短く、東海地区の大学の中でもいち早く改正が実施され、保健体育科目については独自の改正を行わざるを得なかった。改正以来5年目を迎え、履修状況も次第に改善され新カリキュラムでの保健体育科目はほぼ定着したように思われる。このような状況の中で、本学の学生が現行のスポーツ科目をどのように受けとめ、受講しているのか、その現状を知ることが今後の教育活動の一助になるとの視点から調査を実施したものである。

方 法

1. 調査対象

平成7年度『スポーツ基礎』『スポーツ応用1』の受講学生を調査対象とし、内訳は次のとおりである。『スポーツ基礎』1年生429名、2年生38名、3年生14名。『スポーツ応用1』2

年生82名、3年生26名。調査対象数589名であり、回収率は87.8%であった。

2. 調査時期

平成7年12月に授業担当教官の協力を得て、質問紙法調査を実施した。

3. 調査項目

- ①制度（選択制、必修制）について
- ②選択の理由について
- ③履修の評価について
- ④中学校、高等学校で学習した種目について
- ⑤現行の履修種目について
- ⑥今後履修したい種目について
- ⑦授業以外の運動参加について

結果および考察

各調査項目の単純集計の結果は次のとおりである。

1. 制度（選択制、必修制）について

学生は現行の制度をどのように受けとめているのか、結果を表1に示した。全体で見ると、現行の「選択科目でよかった」「どちらかという選択科目でよかった」と回答したものは52.9%であり、「どちらかという必修科目のほうがよかった」「必修科目にすべきだ」と回答したものは6.6%と僅かであった。また、「どちらでもよい」と40.2%の学生が回答している。この全体の傾向は科目別（『スポーツ基礎』『スポーツ応用1』）にみても同じ傾向を示している。保健体育科目の必修・選択について、これまでの調査では現行どおり必修とする学生が約4割、

表1 制度（選択制・必修制）について

項 目	スポーツ基礎		スポーツ応用1		全 体	
	N	%	N	%	N	%
選択科目でよかった	194	40.4	51	45.5	245	41.4
どちらかという選択科目でよかった	57	11.9	11	9.8	68	11.5
どちらでもよい	196	40.8	44	39.6	240	40.5
どちらかという必修科目のほうがよかった	25	5.2	4	3.6	29	4.9
必修科目にすべきだ	8	1.7	2	1.8	10	1.7
合 計	480	100	112	100	592	100

現行+選択が約3割、全期間必修を支持するものも合わせて8割の学生が必修制を支持していると報告した¹⁾。本調査では「現行どおりで選択でよい」とする学生が5割を占めることから、学生は制度についての関心は少なく現行の制度を支持する傾向にあるのではないと思われる。

2. 選択の理由について

表2-1はスポーツ科目を選択した理由(複数回答)を示したものである。全体でみると「運

表2-1 選択の理由

(複数回答)

項 目	スポーツ基礎		スポーツ応用1		全 体	
	N	%	N	%	N	%
運動不足解消のため	428	28.2	104	29.5	532	28.4
ストレスの解消や気晴らしのため	275	18.1	64	18.1	339	18.1
健康(体力)の維持・増進のため	247	16.3	62	17.6	309	16.5
精神面の強化のため	8	0.5	0	0	8	0.4
肥満の解消や美容のため	148	9.8	53	15.0	201	10.7
社会性を養うため	11	0.7	0	0	11	0.6
スポーツや運動技術の向上のため	93	6.1	29	8.2	122	6.5
友人や知人と親睦を深めるため	83	5.5	14	4.0	97	5.2
教職の免許取得のため	196	12.9	16	4.5	212	11.3
そ の 他	28	1.9	11	3.1	39	2.1
合 計	1517	100	353	100	1870	100

「運動不足解消のため」が28.4%と最も多く、次いで「ストレスの解消や気晴らしのため」18.1%、「健康(体力)の維持・増進のため」16.5%の順であった。いずれも健康管理に関するもので、学生の健康管理への関心がうかがえる。次に科目別に選択の理由をみると、『スポーツ基礎』の受講学生は「教職の免許取得のため」12.9%と回答している割合が多い。教職を希望する学生にとっては必修科目であるので、当然の結果であろうと思われる。次に選択した一番の理由について表2-2に示した。学生の51.4%が「運動不足解消のため」と回答している。次いで「教職の免許取得のため」18.2%、「ストレスの解消や気晴らしのため」10.7%の順であった。約半数の学生が「運動不足解消のため」を選択した一番の理由としている。選択した理由は換言すれば、学生が授業に求めている、または期待している目標であるといえよう。このことから授業を進めるにあたって、教師側がより積極的に学生のこうした期待にこたえられるよう努力することが求められよう。

3. 履修の評価について

表3は学生は現行のスポーツ科目をどのように評価しているかを示したものである。全体の

表2-2 一番の選択理由

項 目	スポーツ基礎		スポーツ応用1		全 体	
	N	%	N	%	N	%
運動不足解消のため	215	48.8	64	62.7	279	51.4
ストレスの解消や気晴らしのため	50	11.3	8	7.8	58	10.7
健康（体力）の維持・増進のため	39	8.8	9	8.8	48	8.8
精神面の強化のため	0	0	0	0	0	0
肥満の解消や美容のため	6	1.4	8	7.8	14	2.6
社会性を養うため	1	0.2	0	0	1	0.2
スポーツや運動技術の向上のため	13	2.9	5	4.9	18	3.3
友人や知人と親睦を深めるため	5	1.1	0	0	5	0.9
教職の免許取得のため	98	22.2	1	1.0	99	18.2
そ の 他	14	3.2	7	6.9	21	3.9
合 計	441	100	102	100	543	100

表3 履修の評価

項 目	スポーツ基礎		スポーツ応用1		全 体	
	N	%	N	%	N	%
楽しい	281	57.7	84	73.7	365	60.7
気持ちよい	44	9.0	4	3.5	48	8.0
気分転換に役立つ	123	25.3	20	17.5	143	23.8
つまらない	9	1.8	1	0.9	10	1.7
つらい	2	0.4	2	1.8	4	0.7
何も感じない	28	5.8	3	2.6	31	5.2
合 計	487	100	114	100	601	100

6割が「楽しい」と回答し、次いで「気分転換に役立つ」23.8%、「気持ちよい」8.0%の順であった。この傾向は科目別にみても同様の結果を示し、特に『スポーツ応用1』では73.7%の学生が「楽しい」と回答している。「つまらない」「つらい」と回答した学生は2.2%と僅かであった。又、「つまらない」「つらい」と思う理由は「面倒である」36.4%、「運動が不得意である」27.3%、「興味もてない」18.1%であった。『スポーツ基礎』『スポーツ応用1』ともに、「楽しい」と回答している学生が多く、基礎を履修している学生より応用を履修している学生の方が「楽しい」と回答している割合が多い。

4. 中学校、高等学校で学習した種目について

表4は中学校、高等学校で学習した種目とその種目の「好き」「嫌い」を示したものである。

表4 中学校、高等学校で学習した種目 (%)

種目	学習した	好き	嫌い
体操	74.8	40.4	59.6
卓球	48.1	89.2	10.8
バスケットボール	90.2	73.6	26.4
水泳	89.7	57.9	42.1
バレーボール	93.8	83.9	16.1
ダンス(創作)	72.0	29.3	70.7
ハンドボール	63.5	55.9	44.1
ジャズダンス	9.8	73.0	27.0
ソフトボール	25.9	75.5	24.5
フォークダンス	22.1	64.7	35.3
硬式テニス	60.9	86.9	13.1
ダンス(運動会)	33.9	60.1	39.9
ソフトテニス	37.5	81.9	18.1
陸上競技	86.4	41.1	58.9
バドミントン	70.4	96.4	3.6
その他	10.8	64.7	35.3

注 「好き」「嫌い」の百分率は学習した人数から算出

学習した種目は学習指導要領に準じた種目であり、その中で多く学習した種目は、バレーボール、バスケットボール、水泳、陸上競技、体操の順であった。次に学習した種目の「好き」「嫌い」の割合についてみると、「好き」の比率が高い種目はバドミントン、卓球、硬式テニス、バレーボール、ソフトテニスである。「嫌い」の比率が高い種目は創作ダンス、体操、陸上競技であった。またハンドボール、水泳は「好き」「嫌い」の比率が同じくらいであった。この傾向は内海らが1969年に行った調査²⁾と同じ傾向を示していた。

5. 大学で履修した種目について

『スポーツ基礎』については、各種スポーツ種目(硬式テニス、トレーニング、ゴルフ、バドミントン、卓球)をローテーションしながら、スポーツの基礎技術が楽しく体得できることを目標とし実施している。また『スポーツ応用1』は『スポーツ基礎』の単位習得者を履修条件とし、より高度なスポーツの技術の習得を目標に半期で1種目を実施している。表5は大学で履修した種目および現在している種目とその種目の好き嫌いの割合を示したものである。『スポーツ基礎』をみると、いずれの種目も「好き」の割合が多く、特にバドミントン、卓球、

硬式テニス、ゴルフなどの球技種目は「好き」が高い割合を示している。エアロビクスについては「好き」50.3%、「嫌い」49.7%と他の種目に比べると嫌いの割合が多かった。特に男子

表5 大学で履修した種目 (%)

項 目	スポーツ基礎		スポーツ応用1	
	好き	嫌い	好き	嫌い
硬式テニス	86.4	13.6	86.8	13.2
トレーニング	67.2	32.8	59.7	40.3
卓球	90.9	9.1	97.0	3.0
エアロビクス	50.3	49.7	78.2	21.8
バドミントン	95.1	4.9	98.0	2.0
ゴルフ	81.4	18.6	79.2	20.8
レクリエーション	—		75.3	24.7
アイススケート	—		100.0	0
スキー	—		100.0	0
スクーバダイビング	—		100.0	0

学生の8割がエアロビクスを「嫌い」と回答しており、種目に対する「好き」「嫌い」の性差がみられた。次に『スポーツ応用1』をみると、『スポーツ基礎』と同様にバドミントン、卓球、硬式テニス、ゴルフは「好き」の割合が高い。しかし、エアロビクスについては「好き」78.2%、「嫌い」21.8%と「好き」の割合が多くなっている。また、トレーニングについては「好き」59.7%、「嫌い」40.3%であり、他の種目に比べて「嫌い」の割合が多い。『スポーツ応用1』についてはトレーニング種目は実施されていないので、これは『スポーツ基礎』で履修した結果を示したものである。次に学外集中講義の『スポーツ応用2（スキー教室）』『スポーツ応用3（スクーバダイビング教室）』『スポーツ応用4（スケート教室）』については、いずれも履修した学生の全てが「好き」と回答している。スポーツ科目を選択する際には実施される種目の影響が大きいと考えられ、履修率と関係していると思われる。

6. 今後大学で履修したい種目について

今後履修したい種目および開設してほしい種目を表6に示した。全体で見ると、乗馬、スクーバダイビング、パラグライダーの順であった。この傾向は科目別にみても同じであった。これらの上位の種目はいずれも今までに経験したことのない種目であり、新しいスポーツ種目への挑戦意欲を伺うことができる。一方、レクリエーション的な「楽しみ」への関心の強さも若者の共通点といえそうである。本学では学外集中講義として、平成5年には『スポーツ応用2（スキー教室）』『スポーツ応用3（スクーバダイビング教室）』、次年度は『スポーツ応用4（スケート教室）』『スポーツ応用5（マリンスポーツ教室）』を開設した。開設科目の中には学生の希望する種目も多いことから、学生の希望する種目を授業として取入れているといえよう。しか

しながら、施設・設備、指導者の問題など検討すべきことが多いと思われる。

表6 履修した種目

項 目	スポーツ基礎		スポーツ応用1	
	N	%	N	%
スクーバダイビング	203	14.9	65	16.0
ウインドサーフィン	84	6.2	25	6.2
ヨット	41	3.0	14	3.5
野球	62	4.5	15	3.7
気功	46	3.4	12	3.0
太極拳	38	2.8	14	3.5
ヨガ	36	2.6	20	4.9
フェンシング	37	2.7	14	3.5
アーチェリー	121	8.9	28	6.9
パラグライダー	159	11.6	51	13.0
なぎなた	34	2.5	13	3.2
乗馬	267	19.6	70	17.0
サッカー	53	3.9	13	3.2
ラクロス	121	8.9	35	8.6
ラグビー	14	1.0	2	0.5
その他	49	3.6	14	3.5
合 計	1365	100	405	100

7. 授業以外の運動参加について

表7は授業以外の運動参加について示したものである。全体では「学内の運動クラブ（サークル）に参加している」17.5%、「学外の運動クラブ（サークル）に参加している」17.8%であり、「スポーツクラブに通っている」は3.4%と僅かであった。また、「特に授業以外の運動

表7 授業以外の運動参加

項 目	スポーツ基礎		スポーツ応用1		全 体	
	N	%	N	%	N	%
学内の運動クラブ(サークル)に参加している	86	16.8	23	20.7	109	17.5
学外の運動クラブ(サークル)に参加している	101	19.8	10	9.0	111	17.8
スポーツクラブに通っている	15	2.9	6	5.4	21	3.4
その他	20	3.9	6	5.4	26	4.2
特に体育活動には参加していない	289	56.6	66	59.5	355	57.1
合 計	511	100	111	100	622	100

に参加していない」学生は57.1%であった。必修制の学生より選択制の学生のほうが授業以外に運動に参加している傾向がみられ、選択制の学生はより積極的に運動に参加している傾向があることから、スポーツ科目を履修している学生は、履修していない学生に比べて授業以外にも運動に参加している傾向があるといえよう。

ま と め

調査項目の結果をまとめると次のようである。

1. 制度（選択制、必修制）について

現行の「選択科目でよい」とする学生が52.9%、「必修科目がよい」とする学生は6.6%と僅かであり、「どちらでもよい」とする学生は40.2%であった。この全体の傾向は科目別にみても同じであった。学生の制度についての関心は少なく、現行の制度を支持する傾向にあるのではないと思われる。

2. 選択の理由について

全体では「運動不足解消のため」が28.2%と最も多く、次いで「ストレスの解消や気晴らしのため」18.1%、「健康（体力）の維持・増進のため」16.5%の順であり、いずれも健康管理に関するもので、学生の健康管理への関心がうかがえた。選択した一番の理由については、学生の51.4%が「運動不足解消のため」と回答していた。選択した理由は換言すれば学生が授業に求めている、または期待している目標であるともいえよう。このことから授業を進めるにあたって、教師側がより積極的に学生のこうした期待にこたえられるよう努力することが求められよう。

3. 履修の評価について

全体では60.7%が「楽しい」と回答し、次いで「気分転換に役立つ」23.8%、「気持ちよい」8.0%の順であった。この傾向は科目別にみても同様の結果を示し、特に『スポーツ応用1』では73.7%の学生が「楽しい」と回答している。「つまらない」「つらい」と回答した学生は2.2%と僅かであった。又、「つまらない」「つらい」と思う理由については「面倒である」36.4%、「運動が不得意である」27.3%、「興味がもてない」18.1%であった。

4. 中学校、高等学校で学習した種目について

多く学習した種目は、バレーボール、バスケットボール、水泳、陸上競技、体操の順であった。学習した種目の「好き」「嫌い」の割合については「好き」の比率が高い種目はバトミントン、卓球、硬式テニス、バレーボール、ソフトテニスであり、「嫌い」の比率が高い種目は創作ダンス、体操、陸上競技であった。ハンドボール、水泳は「好き」「嫌い」の比率が同じ

くらいであった。この傾向は内海らが1969年に行った調査⁴⁾と同じ傾向を示していた。

5. 大学で履修した種目について

『スポーツ基礎』については、いずれの種目も「好き」の割合が多く、特にバドミントン、卓球、硬式テニス、ゴルフなどの球技種目は「好き」が高い割合を示していた。『スポーツ応用1』についても『スポーツ基礎』と同様に球技種目の「好き」が高い割合を示していた。また学外集中講義の『スポーツ応用2 (スキー教室)』『スポーツ応用3 (スクーバダイビング教室)』『スポーツ応用4 (スケート教室)』については、いずれも履修した学生の全てが「好き」と回答していた。

6. 履修したい種目について

今後履修したい種目および開設してほしい種目は1位乗馬、2位スクーバダイビング、3位パラグライダーの順であった。

7. 授業以外の運動参加について

全体では「学内の運動クラブ(サークル)に参加している」17.5%、「学外の運動クラブ(サークル)に参加している」17.8%であり、「スポーツクラブに通っている」は3.4%と僅かであった。また、「特に授業以外の運動に参加していない」学生は57.1%であった。

参考文献

- 1) 武藤紀久他17名；大学保健体育受講学生の授業に関する意識(第1報) - 体育実技について-, 大学保健体育研究 X I, p. 1~42.
- 2) 内海, 小笠原, 畠山, 佐藤；女子大学生の体育に関する意識, 日本女子体育連盟紀要
- 3) 加藤幸久他17名；東海地区における大学保健体育科目の改革状況に関する調査(2) - 設置基準改正(大綱化)への対応の実態-, 大学保健体育研究 X V, p. 25~160.
- 4) 中島豊雄他10名；東海地区の大学保健体育科目における新カリキュラムの実施状況とその問題点 - 選択制を導入した大学の事例から-, 大学保健体育 X V, p. 161~210.
- 5) 文部省高等教育局学生課編(1993)；大学と学生, 特集・課外活動.